

猿丸集所収の万葉歌

新沢 典子

一、はじめに

平安期以降に平仮名書きされた万葉歌のいくつかに古い万葉集の訓みの留まることが、『赤人集』『古今和歌六帖』といった平安期仮名文献の本文研究を通じて再検証され、具体的な様相が明らかとなってきた^①。それに伴い、十一世紀を遡らない現存古写本と八世紀の万葉集との間を繋ぐ資料として、平安期の平仮名書きの万葉歌の価値が改めて認められつつある。

そのうち、『猿丸集』の本文については、典拠である万葉集本文との異同が目立つのだが、泉紀子「『猿丸集』考―『万葉集』作者記載歌群について―」^②は、つとに、そうした異同は誤読や誤写によって生じたものであって、猿丸集本文には現在の『万葉集』諸訓には見られない古訓や古態の残ることを指摘している。本研究では、猿丸集の本文について、万葉集の古写本に残る訓や古今和歌六帖など他の平仮名書きの万葉歌本文との異同を調査し、誤読や誤写を仮定せずに、その関係性をどのように捉えられるかを考察した。その中

で気づいたいくつかの点について報告したい。

二、猿丸集の系統

『猿丸集』は、万葉集の作者不明歌・作者判明歌と、古今和歌集のよみ人しらずの歌から成る歌集である。『猿丸集』として成立した時期については不明だが、「公任の『三十六人撰』の猿丸歌はすべてこの家集に見えるので、『三十六人撰』が成立した拾遺集時代には存在していた」（『和歌文学大辞典』猿丸集・加藤幸一）と考えられる。

諸本の関係については、配列と詞書の内容、歌の出入りから大きく二類に分かれる。以下、『私家集大成』解題（執筆・犬養廉）、『新編私家集大成』解題（執筆・片桐洋一）^④の記述を参考に、諸本の関係をまとめる。

I 類本：（1）冷泉家時雨亭叢書『資経本私家集一』所収「猿丸集」（書陵部甲本の親本。『新編私家集大成』の底本。歌数は五二首）。書陵部甲本「猿丸集」（五一〇・一二）（『御所本三十六人集』（新典社）に影印。『私家集大成』猿丸集Iの底本）。

（2）書陵部乙本（五〇六・八）（甲本の第四〇・四四番の二首を欠く。歌数は五〇首）。陽明文庫蔵（二二・二一）（3）冷泉家時雨亭叢書『平安私家集八』所収の宝治元年本「猿丸大夫

集」(書陵部丁本の親本)。書陵部丁本(五〇一・一一六)(甲本の第二〇・二二～二六番の六首を欠き、重出二首を含む。歌数は四八首(実質四六首))。(4)書陵部丙本(五一・一二)(甲本の第二・四〇・四四番の三首を欠く。歌数は四九首)。西本願寺本。群書類従本。その他、伝行成筆「猿丸集切」(小松茂美『古筆学大成17』・『私家集大成』新編補遺(執筆者…片桐洋一)収載、八葉一七首)。

Ⅱ類本:「出てゆく人をと、めむかたもなし となりのかたにはなもひぬかな」の歌を有する、清輔本によって校合された本。

(1)書陵部蔵戊本(五〇一・六八)、(Ⅰ類甲本第四七番を欠き、右の一首を含む。歌数は五二首。『私家集大成』・『新編私家集大成』猿丸大夫集Ⅱの底本)。

(2)歌仙家集本・陽明文庫蔵本(一〇・六八、戊本より第九・一一・二二～三一・三九・四〇・四六・五二番の一六首少ない。歌数は三七首)。

Ⅰ類本の詞書はⅡ類本に比して増幅整備されており、より新しい形態を示すものと見られるという。本文については、細かな異同は複数あるものの、島田良二『平安前期』私家集の研究⁵⁾「猿丸大夫集」、『和歌文学大辞典』「猿丸集」(加藤幸一⁶⁾)が指摘するように、大きく異なる点は見えず、同じ本を祖とする同系統のものと考えるよい。

本稿では、Ⅰ類本(資経本⁷⁾)を本文として、必要に応じてⅡ類本(書陵部蔵五〇一・六八⁸⁾)を参照して、出典たる万葉集諸写本に残る漢字本文や訓との異同を整理していく。

三、成立

万葉集を典拠とする歌は全二五首あり、その内訳は、万葉集において作者名が記載されている歌が二三首、作者名不記載の歌が二一首である。作者名記載の歌一三首については、弓削皇子作歌三首(⑧1467、②122、②120)の他、高市黒人妻(③281)、麻田陽春(④569)、間人大浦(③290)、石川老夫(⑧1534)、丹比真人(⑧1609)、田部櫨子(④495)、遣新羅使(⑮3661)、中臣宅守(⑮3727)、河辺宮人(③436)、石川夫人(②154)が各一首と、作者の偏りは見られない。

典拠となる巻についても次の表に示すとおりばらつきがあつて、万葉集から直接採ったと仮定しても、採歌の方針を見定めることができない。作者記載歌のほとんどが人麻呂関係歌に集中し、他の歌人による作が一〇首のみである人麿集や、万葉集卷十の一部(すなわち作者未詳歌)がほぼそのままの配列で並ぶ赤人集に比して、現存万葉集との関係性が見えにくい集であるといえる。

卷一		卷十一	四首
卷二	三首	卷十二	四首
卷三	三首	卷十三	
卷四	二首	卷十四	
卷五		卷十五	二首
卷六		卷十六	
卷七	一首	卷十七	
卷八	三首	卷十八	
卷九	一首	卷十九	
卷十	二首	卷二十	

このように、猿丸集収載の万葉歌は、万葉集において作者が記載されている歌と不記載の歌の数とが、おおそ半々を占めるのだが、仮に一つの歌集を編むという意図の下、万葉集と古今集から歌を抽出したのだとすれば、猿丸集収載の古今集歌はよみ人知らずの歌ばかりなのであるから、万葉集からも作者名のない歌が選ばれてよいように思われる。この点から推察すれば、当初より一つの歌集を編む目的の下で万葉集と古今集からそれぞれ歌を採集したというよりも、何らかの形で存した万葉集抄と古今集のよみ人知らず歌の集とが一緒になって、猿丸集の名が冠せられたと考えるのが自然である。とすれば、猿丸集収載の万葉歌本文に関しては、猿丸集成立の一応の下限とされる拾遺集成立の頃よりも幾分遡る可能性があることになる。

もちろん、これは想像の域を出るものでなく、万葉歌と古今集よみ人知らずの歌とが合わさった事情についてこれ以上の憶測を重ねることはできない。けれども、猿丸集の本文を見ると、典拠となっ

た万葉集（あるいはその抄出本）にあったと思しき比較的古い訓を残す場合が存す。次にそうした例について見てゆこう。

四、猿丸集本文と万葉集・非仙覚本の訓

冒頭に述べたように、『赤人集』や『古今和歌六帖』といった平安期成立の平仮名書きの万葉歌集に万葉集の古訓点の残ることが、池原陽斉や田中智子の調査によって改めて確認されている。

田中智子「古今和歌六帖の万葉歌と天曆古点」によると、古今和歌六帖本文には、巻四・七一一番歌・第一（二句や七六七番歌・第二句など桂本独自の特異な訓と一致する例が見られるという。それらを詳しく見ると、古今和歌六帖と桂本に共通する独自部分が六帖の題に一致するなど、桂本の訓による古今六帖本文の改変とは考えにくいとして、

畢竟、『古今六帖』が撰集資料とした『万葉集』巻四は、十世紀中頃に行われた『万葉集』訓読作業の成果をふまえた、仮名書きの訓を有する本であった可能性が高いとみられる。

と結論する。

一方、赤人集の方は先にも述べたとおり、収載歌の配列など外形的にも万葉集巻十の抄本であることは明らかなのだが、池原陽斉「『万葉集』伝来史上における『赤人集』の位置^⑩」によると、鎌倉

期の僧侶・仙覚の校訂を経ていない本（以下、「非仙覚本」とする）のうち、漢字本文から離れた特徴的な訓が赤人集本文に共通する例が複数確認できることに加えて、万葉集古写本にもあった歌が載ることなどから、赤人集は現存諸本よりも古い段階の万葉集から派生した歌集であったと考えられるという。

こうした研究に導かれながら、ここでは猿丸集に関して、非仙覚本の訓との共通性がどの程度見られるかを確認したい。

猿丸集本文は、現存する万葉集古写本の訓と、部分的に異同は見えるもののそれほど大きく異なっていない。けれども、古今和歌六帖ほどには漢字本文に即しておらず、独自の訓みが目立つ（詳しくは後掲するいくつかの例を参照されたい）。

注意されるのは、漢字本文を訓んだのではないかと思われる例が、部分的にはあるが散見するという点である。次にそのうち三例を挙げる。¹²⁾

①四長鳥 居名山響尔 行水乃名耳所縁之内妻波母(①2708)

〔二云名耳所縁而恋管哉将在〕

【諸本・第三句訓】 嘉・古・廣「ゐなやまとよみ」(古・廣は

カタカナ)、類「ゐなのやまとよに」。

【猿丸集・第三句】 I・II六「ゐな山ゆすり」

②棕橋乃山乎高可夜隠尔 出来月乃光乏寸(③290)

【諸本・第三句訓】 類「よがくれて」、紀・廣「ヨガクレニ」。

【猿丸集・第三句】 I八「よをこめて」・II八「夜こもゝに」

③朝日影尔保敝流山尔照月乃不猷君乎 山越尔置手(④495)

【諸本・第四句訓】 元・金・類「あかざるきみを」、紀・細「ア

カレヌキミヲ」。

【猿丸集・第四句】 I一四「よそなるきみを」・II一二「いはぬ君を」。

右のうち、第二例を見ると、第三句の「夜隠尔」を万葉集諸写本が「よがくれ(に／て)」と訓む一方で、猿丸集I類本には「よをこめて」とある。「隠」を「こむ(籠)」と訓むわけである。また、第三例の第四句「不猷君乎」の動詞「猷」を万葉集諸写本は「あく」と訓むが、猿丸集II類本は「いとふ」とする。猿丸集本文は万葉集の現存古写本とは別に漢字本文を訓んだかのごとくである。

次の例なども同様である。第四句の一文字目「其(鳴音乎)」は、万葉集諸本では「その」と訓まれる。猿丸集は「しか」とする。

霍公鳥無流国尔毛去而師香其鳴音乎 聞者辛苦母

(⑧1467、弓削皇子)

【諸本・第四句訓】 類・紀・廣「そのなくこゑを」

【猿丸集・第四句】 I四「しかなくこゑを」

次の例は、非仙覚本には訓自体がなく、古今和歌六帖でも第三句

は漢字がそのまま本文を成す。しかしながら、猿丸集では第三句を「なかひさし」と訓んでいる。

梓弓弓束卷易中見刺更雖引君之随意(112830)

【諸本・第三句訓】非仙覺本訓なし。

【六帖⑤898】あづさゆみゆづかまきかへ中見刺さらにひくとも君がまにまに⁽¹³⁾

【猿丸集Ⅰ29】あづさゆみゆづかあらためなかひさしひかずもひきもきみがまにまに

【猿丸集Ⅱ28】あづさ弓ゆづるあしためなかひさしひかずもひきもおのがまに

このような例からすると、猿丸集本文が現存万葉集の訓を直接の典拠としたとは考えにくい。また、次に引くように、古今和歌六帖本文からの影響も看取されない。

大船之泊流登麻里能絶多日二物念瘦奴人能児故尔

(2122、弓削皇子)

【六帖⑤478】おほぶねのとまるとまりのたゆたひにもの思ひやせぬ人のこゆへに

【猿丸集Ⅰ23】おほぶねのいづるとまりのたゆたひにものおもひわびぬ人のこゆへに

【猿丸集Ⅱ26】おほ船のまつがとなりにもゆるひの物おもひわびぬひともとゆへに

人言之繁比日玉有者手尔卷以而不恋有益雄

(3436、河辺宮人)

【六帖⑤661】ひとごとのしげきこのごろ玉ならばてにまきもちてこひざらましを

【猿丸集Ⅰ24】人ごとのしげきこのごろたまならばてにまきつけてこひずぞあらまし

【猿丸集Ⅱ27】ひとごとのしげきこの比たまならばてにまきつけて恋ずぞあらまし

古今和歌六帖本文が万葉集の漢字本文から大きく隔たらないのに対して、猿丸集には、「瘦」を「やす(瘦)」でなく「わぶ(侘)」とするような、漢字の義よりも一首としての意味を重視した本文が目立つ。この点については、小川靖彦「万葉集古訓の詩法―文学史・文化史のなかの天暦古点」⁽¹⁴⁾のいうように、広く平安期の訓みに見られる特徴であり、当時にあつてはあり得べき訓み方であつたと考えられるわけだが、万葉集本文から離れた猿丸集本文の中には、他のテキストに残る万葉歌と共通する例があり、猿丸集が万葉集を好き勝手に訓んだ(あるいは訓んだものをもととする)というわけではなく、何らかの典拠が存すると考えられる。次に、そうした例を見てゆこう。

五、歌経標式の万葉歌との一致

猿丸集はどのようなテキストに残る万葉歌と共通するのか。

次の万葉歌は、歌経標式、赤人集、猿丸集に収載される。⁽¹⁵⁾

梓弓引津邊有莫告藻之花咲及二不会君⁽¹⁰⁾ 1930)

【赤人集Ⅱ92】 あづさゆみひきつべきよやなつくさのはなさ
くまでにあはぬきみ哉

【歌経標式22】 阿豆佐由美(あづさゆみ) 比岐都能倍那留(ひ
きつのべなる) 那能利蘇母(なのりそも) 婆
那婆佐俱麻弓(はなはさくまで) 伊母阿婆奴
可母(いもあはぬかも)⁽¹⁶⁾ (当麻大夫)

【猿丸集Ⅰ16】 あづさ弓ひきつのはなかなのりそのはなさく
までといもにあはぬかも

【猿丸集Ⅱ14】 梓弓ひきつのへなるなのりそのはなさくまで
にいもにあはぬかも

各本文を見比べてみると、赤人集第四句以下は万葉集の漢字本文に即していることがわかる。猿丸集は「君」を「いも」とし、第四句と第五句の語順が入れ替わる点でそれらと異なる。「君」を「いも」と訓む、またその逆なども、平安期の訓みにおいては決して珍しいものではないが、猿丸集本文が歌経標式本文とほぼ同一である点が注意される。

六、異伝系本文との一致

さて、猿丸集には、異伝系本文を伴う万葉歌の場合、異伝系本文を本文とするという特徴が見られる。具体的には異伝を伴う五首中の四首について、猿丸集では本文ではなく異伝系本文に即した訓が本文を成している。次にその四首を挙げる。

①妹門去過不得而草結風吹解勿又将顧(二云直相麻弓尔)

(123056)

【猿丸集Ⅰ5】 いもがかどゆきすぎかねて草むすぶかぜふき
とくなあはん日までに

【猿丸集Ⅱ5】 いもが門ゆき過かてに草むすぶぜ吹ときなあ
はんひまでに

②四長鳥居名山響尔行水乃名耳所縁之内妻波母

(一云名耳所縁而恋管哉将在)(112708)

【猿丸集Ⅰ6】 しながどりゐなの(ミセケチ) 山ゆすりゆくみ
づのなのみよにいりてこひわたるかな

【猿丸集Ⅱ6】 しながどりゐな山ゆすり行水のなのみながれて
恋わたるかも

③梓弓 末者師不知 雖然 真坂者君尔 縁西物乎 (122985)

一本歌曰 梓弓 末乃多頭吉波 雖不知 心者君尔 因之物乎

【猿丸集Ⅰ13】 あづさゆみすゑのたづきはしらずともころ

はきみによりにけるかな

【猿丸集Ⅱ11】 あづさ弓すゑのたづきもしらねども心は君に

よりにけるかな

【伊勢物語24段】 梓弓引けど引かねど昔より心は君によりに

しものを

【六帖⑤895】 あづさゆみすゑのたづきはしらねどもころ

はきみによりにし物を

④可是能牟多与世久流奈美尔 伊射里須流 安麻乎等女良我 毛能

須素奴礼奴 一云 安麻乃乎等売我 毛能須蘇奴礼濃

(153611)

【猿丸集Ⅰ21】 風をいたみよせくるなみにあさりするあまを

とめごがものすそぬれぬ

【猿丸集Ⅱ20】 かぜをいたみよせくる浪にい (右に「あ」さ

りするあまおとめごがものすそぬれぬ

右のように、万葉集異伝系本文が平安期の仮名文献において和歌本文を成す例は、猿丸集の他に、伊勢物語や人麿集、赤人集、古今

和歌六帖、家持集にも見られる。一見、大した問題でなさそうだが、仙覚校訂以前の万葉集写本には、異伝部分に訓が付されていないのであり、仮名文献の中に異伝系本文の「訓」が残っているのは、典拠が現存写本と同様のものであったとすると、不審と言わざるを得ない。⁽¹⁷⁾

もちろん、猿丸集や他の仮名万葉の集が、万葉集の異伝注記部分から詞句を採用したという可能性も否定できないけれども、かかる傾向が、次の例のように、

草陰之荒蘭之埒乃笠嶋乎 見乍可君之山道超良無

〔一云 三坂越良牟〕 (123192)

【家持集Ⅱ166】 くさかげのあさるのまつのかけしまをみ

つ、や君かみさかこゆらん

【六帖③454】 くさかげのあらゐがさきのかさしまをみつ

つや君がみさかこゆらん

猿丸集のみならず、赤人集、古今和歌六帖、伊勢物語、家持集などに広く見られることを考慮すると、平安中期あたりまでに、いまの万葉集と本文に出入りのある万葉集抄出本の存した可能性を想定してよいように思われる。⁽¹⁸⁾ そうした万葉集抄出本の一部が、猿丸集の前半部を成すのではないだろうか。

このように、猿丸集にもまた現存写本には残らない古い万葉集の訓みの残る可能性が認められるわけだが、この点については、次の

例からもうかがい知ることができる。

次の歌の第五句は万葉集本文に即せば、「やどはなくして」としか訓めず、万葉集諸本（類聚古集・紀州本・古葉略類聚鈔）も基本的に「やどはなくして」とする（但し、廣瀬本の本行訓は「ヒトハナクシテ」。一方、猿丸集の本文には、漢字本文とかけ離れた「ともなしにして」とある。猿丸集本文と同じ「ともなしにして」の訓は、他に、廣瀬本の書入れ（本行訓の右）と古葉略類聚鈔（本行の右）の書入れにも見られる。廣瀬本と古葉略類聚鈔の書入れが他の写本との校合の跡を示すのだとすれば、猿丸集がかつてあった万葉集の訓を残している可能性が想定されよう。⁽¹⁹⁾

志長鳥 居名野乎来者 有間山夕霧立 宿者無而

〔一本云猪名乃浦廻乎 榜来者〕

（⑦1140）

【諸本・第五句訓】「ヤドハナクシテ」…古右に「トモナシニシテ」漢字の左に「ヒトハナクシテ」、廣「ヒトハナクシテ」訓の右に「トモナシニ」、その左に「或ヤドハ」。訓の左に「（合点）ヤ（ドハナクシテ）」

【猿丸集Ⅰ27】しながどりゐなのをゆけばありま山ゆふぎり
たちぬともなしにして

【猿丸集Ⅱ24】しながどりゐなのをゆけばありま山夕霧たち
て友なしにして

【古今集1119】しながとりゐなのをゆけばありまやまゆふ

ぎりたちぬあけぬこのよは ひとまろ

〔筋・元・巻のみ。巻九羈旅歌四〇八と四〇九の間〕

【六帖②22】しながどりゐなのをゆけばありま山ゆきふりし
きてあけぬこのよは ひとまろ

ちなみに、右の歌は、古今和歌集筋切本・元永本・唐紙卷子本と古今和歌六帖にも残る。第五句は双方とも「あけぬこのよは」であり、古今六帖と古今和歌集の一部写本に残る本文とは典拠を同じくするものと判断できる。

では、廣瀬本書入れと猿丸集本文が一致するという点については、どのように捉えるべきか。

廣瀬本書入れの性格については不明な点が多いが、廣瀬本祖本と定家依拠の万葉集との本文の近さが指摘されている。⁽²¹⁾ 実際に右の歌の収載巻である万葉集巻七を見ると、廣瀬本の本行訓や書入れが定家著の歌学書『五代簡要』に残る本文と一致する場合が見え、廣瀬本の書入れと定家に伝わった万葉集本文（あるいは訓）との近さを示唆する。

大海尔 嶋毛不在尔 海原 絶塔浪尔 立有白雲（⑦1089）

【諸本・第一句訓】「わたつみに」元・類・紀・廣・京緒／「ヲホウミニ」元・緒・「オホウミ」廣書入／（古）には歌自体ナシ）

【諸本・第三句訓】廣書入「ウナハラノ」・五代簡要「うなはらの」

／「あまのはら」元・類・紀・廣・京緒

少なくとも先掲の万葉歌(⑦1140)については、猿丸集本文は、廣瀬本書入れに共通するわけであり、漢字本文から離れた猿丸集の万葉歌が伝承の結果生じた本文の揺れなどというものでなく、廣瀬本の校合に用いられたような、現存万葉集諸本を恐らく遡る散逸万葉集抄本文の、平仮名書きではあるものの、名残であることは間違いないといえよう。

七、おわりに

歌数が少なく、推測の域を出ることは難しいながら、如上の傾向を考慮すると、人麿集や赤人集、古今和歌六帖に残る平安期に平仮名で書かれた万葉歌や、万葉集写本に残る非仙覚本の訓などと直接関わらないように見える猿丸集が、歌経標式や伊勢物語収載の万葉歌のもととなった、現存の万葉集古写本には残らない古い万葉集の訓を、部分的にはあっても残す可能性を考えてみてよいように思われる。

注

- ① 池原陽斉『萬葉集』伝来史上における『赤人集』の位置(『古代中世文学論考』第三十集(二〇一四年一〇月)、同『萬葉集訓読の資料と方法』笠間書院に収載)。田中智子「古今和歌六帖の万葉歌と天曆古点」(『東京大学国文学論集』第二二号、二〇一七年三月)。
- ② 犬養廉「猿丸大夫とその集―王朝古歌集に関する一つの試論―」(『国語国文研究』第二二号、一九六二年六月)に指摘がある。
- ③ 泉紀子「『猿丸集』考―『万葉集』作者記載歌群について―」(片桐洋一編『王朝文学とその系譜』一九九一年一〇月)。
- ④ 『私家集大成中古I』『猿丸(書籍版解題)』(執筆・犬養廉、明治書院、『新編私家集大成』『猿丸(新編補遺)』(執筆・片桐洋一、古典ライブラリー)。
- ⑤ 島田良二「猿丸大夫集」『平安前期』私家集の研究(一九六八年、桜楓社)。
- ⑥ 『和歌文学大辞典』『猿丸集』(執筆・加藤幸一、古典ライブラリー)。
- ⑦ 『冷泉家時雨亭叢書 資経本私家集二』所収「猿丸集」(朝日新聞社)を参照し、私に濁点を付した(以下、他のテキストの仮名本文も同様である)。
- ⑧ 書陵部所蔵資料目録・画像公開システム「猿丸太夫集」(五〇一・六八)(<https://shoryobu.kunaicho.go.jp>)による。
- ⑨ 歌数は、書陵部蔵「柿本人麿集」(五〇一・二九五)を底本とする『和歌文学大系 人麻呂集・赤人集・家持集』解説(執筆・阿蘇瑞枝、明治書院)による。
- ⑩ 田中智子前掲(注1)論文。
- ⑪ 池原前掲(注1)論文。
- ⑫ 万葉集本文引用は、『万葉集CD・ROM版』(校訂・木下正俊、塙書房)による。写本の名は以下の略号で示した。元・元暦校本、金・

金沢本、類・類聚古集、嘉・嘉暦伝承本、古・古葉略類聚鈔、紀・紀州本（巻十までは非仙覚本）、細・細井本（巻四・五・六は冷泉本系）。なお、京楮は京大本（仙覚文永本）代楮書入れを指す。

(13) 古今和歌六帖の歌番号は『図書寮叢刊古今和歌六帖上巻本文篇』（養徳社）に、本文引用は、『細川家永青文庫叢刊 古今和調六帖』（汲古書院）による。

(14) 小川靖彦『萬葉集古訓の詩法—文学史・文化史のなかの天曆古点—』（鈴木日出男編『ことばが拓く古代文学史』一九九九年、笠間書院。後に「天曆古点の詩法」として『萬葉学史の研究』おうふうに収載）

(15) 古今和歌六帖は第四句以下が「いづれのうらのあまかからん」と、大きく異なる。

(16) 歌経標式本文引用は、『歌経標式—影印と注釈』（沖森卓也・平沢竜介・矢嶋泉・佐藤信著、おうふう）による。

(17) かかる傾向は、平安期に流布した「万葉集」が現存の万葉集と異なる本文を含んでいた（具体的には異伝系本文を本文とする集があった）可能性を示唆すると考えられる（拙稿「古今和歌六帖と万葉集の異伝」『日本文学』五七巻一号、二〇〇八年一月）。

(18) 池原陽斉「平安時代中期における『萬葉集』伝来の一様相—西本願寺本『赤人集』の形態を徴証として—」（『上代文学』第一一四号、二〇一五年四月。後に「西本願寺本赤人集の成立」の題で『萬葉集訓読の資料と方法』笠間書院に収載）は、西本願寺本赤人集の形態などから、十世紀後半に平仮名別提訓本の萬葉抄本が存したと推定する。

(19) 廣瀬本の祖本や校合本の本文や訓が古葉略類聚抄に取り込まれている可能性について、拙稿「古葉略類聚鈔の本文と訓—廣瀬本との比較を通して」（『萬葉集をヨム—方法論の過去・現在・未来—』二〇一九年、笠間書院）で別に論じた。

(20) 古今集本文引用は、『古今集校本〔新装ワイド版〕』（西下経一・滝沢貞夫編、笠間書院）による。

(21) 山崎福之「『定家本萬葉集』攷一」「『上代語と表記』（西宮一民編、おうふう、二〇〇〇年）、同「『定家本萬葉集』攷二—冷泉家本『五代簡要』の周辺—」（『上代文学』第八九号、二〇〇二年一月）。